

本多弘之

honda hiroyuki

宗教心と根本言

4



法然はこれを「選択本願」であると聞き当った。

み超えることができない壁があるということである。

「ここで言う根本言とは、「名言となつた願心」の謂いである。「名となつた如来」であるとも言われている。すなわち言葉となつた如来「南無阿弥陀仏」である。言葉になるとは、形なき願心が、言葉を選んで表現していく

それは何のためかというなら、言葉を通してしか本願の根源をとらえることができないのが、我ら愚かる凡夫だという如來の智眼の見通しのためである。衆生から言えば、自己の努力では決して有限の分限から出られない限界、すなわち、形なき無限の領域には踏み

て、あえて「即」の文字を通して、「生死即涅槃」とか、「煩惱即菩提」とかと言われている。これは言うならば、無限の側の智慧の眼からの表現なのである。つまり仏陀のボダイ(覚り)の内実を、仏陀の側から言い当て

ているのである。有限の無明内存在としては、この「即」は絶対に飛び越えることができない断絶であり、いわば「生から死」への断絶を、あえて「即」と示している絶壁なのである。

生から死に臨むことは、凡夫としては向こう側の見えない壁に向かい合うようなことである。よく言われるようによく他人の死を見るることはできるし、二人称の死（それは別れがたい哀惜をともなうのだが）は体験しうるが、死を一人称で体験することはできない。この絶対の壁を突破することが、大涅槃と表現される仏道の究極だとされているのである。すなわち大涅槃とは、一人称的に「死の体験」をあえて試みる内実であるとも言える事柄なのである。これを禪では「大死一番絶後によみがえる」と言われ、「生きながら死人となりて」などと表現されているのである。

清沢満之に、「生のみが我らにあらず、死もまた我らなり、我らは生死を併有するものなり」という言葉がある。これは一般的には、「生死一如」と言われる事柄であろう。しかし、清沢の表現には、一般的表現に止まらない強い発信力を感じる。この背景には、「生前死後は、雲霧に閉ざされている」という彼の表白があり、彼の身に迫っている肺結核による死の怖れが五六時中、襲いかか

る中での覚悟の言葉だということもある。しかしこの表現には、そういう彼の個人的事情を超えた普遍的真理という面があると思う。それは生命には寿命の有限性があり、生の終わりが死であることがある。その普遍的事実を、常に現前の事実として自覚することに、この表現に込められた強い発信力の源があるのでと思う。

この表現を、試みに「生死即涅槃」という大乗仏教の根本標識の表現として、考察してみよう。仏教語の「生死」とは言うまでもなく、無明の惑いに取り付かれてこの人生を生きている立場であり、現実の諸問題に取り巻かれて悩み苦しみつつ生活していること全般を指す言葉である。それに対する涅槃とは、仏陀のさとりの境涯であり、煩惱に縛られて生きている凡夫のあり方から完全に解放された境地を表す言葉である。この絶対に境位を異にする生存の事実を、大乗の仏道は積極的に突破すべきことを主張しているのである。

しかし、よく考えてみれば、仏陀の大悟と言つても、無明の存在を自覚することではなかつたか。無明の自覚が、晴々と人生的意味をいたゞく智見だというところにこそ、仏教の根本的立場があるはずである。つまり生死を厭うのでなく、生死の苦惱の成り立ちを深く自覚するところに、仏教の目的が見定められるべきなのである。それを「即」の文字に

収めて大乗仏教の標識としたのではなかつた。そう考えてみると、生死の外に仏道を立てると言うことは、苦惱の人生からの逃避でしかないということになる。

しかしながら、ここに与えられている身の

事実には、煩惱具足でしかないということがある。「この生への執着を捨てよ」ということが、「大死一番」の意味だとするなら、親鸞が表白するように、「煩惱具足の凡夫」には「自らこの執着から出ることなどできない」ということになるであろう。根本の問題は、この現前の愚かな凡夫の求めるべき真実の存在のあり方である。それを親鸞は、求め続けて、「本願に帰す」という決断をした。阿弥陀の本願力に帰することを選んだのである。それが言うならば、自力の生に死ぬという意味を持つてゐると思うのである。

自力の執心は、自らのいのちの根に入り込んでいて、自分でも取り除くことなどできない。その妄執を破つて凡夫に信ぜずにはおれないというところを、本願力が開いてくる。そこまで凡夫を深く信じ凡夫を歩ませて、信心を超発させる方が「本願力の回向」なのだと、親鸞は気づいたのである。因位の本願が成就して願力成就のはたらきとなるという事実を、自己の信心において確認したということが、